

鄧小平は勝ったのか——「人民の波」の高揚と沈潜

なかじまみね
中嶋嶺雄 (東京外国語大学教授)

天安門広場を埋めつくした百万人デモは高揚から終結へ向かっている。しかし、党中央の権力闘争や路線闘争に飽き飽きしている中国の民衆は、やがて自らの手で新しい歴史を切り開いていくであろう。

「いかなる指導者であっても、個人が独断専行したり、個人を組織の上に君臨させたりすることは許されない」(中国共産党規約第十六条)

「すべての権力は腐敗する。絶対的権力は絶対的に腐敗する」(ジョン・E・アクトン)

歴史的な「人民革命の波」

四月十五日の胡耀邦前総書記の不遇な死を契機とした中国の学生運動は、中華人民共和国建国以来未曾有の、そして中国近現代史に類例をみない大規模な民主化要求の学生運動となつて、この四月から五月にかけての首都北京を、そして中

識人および市民が建国以来初めて近代的な政治意識に目覚め、そうした鋭い問題意識によって運動を展開してきたところに大きな特色があるといえよう。私は今回の運動を一種の「市民革命」、そして「知識革命」としてとらえることができるのではないかと考えている。

もとより学生運動の高揚は今日の共産党一党支配に決定的な打撃を与え、権力構造の亀裂をさらに深化させたといえようが、こうした運動が必ずしも短期的に勝利を収めるにはあまりにも厳しい状況があった。しかしながら、五月二十日午前十時の戒厳令布告にもかかわらず、軍が動かなかったという深刻な事態をもたらしたのであり、これは戒厳令布告の当事者にとって根本的な権威の喪失だといわなければならぬ。

今回の運動の歴史的意義は、中国における一九一九年の五・四運動に匹敵するものといふこともできようし、さらに一九六八年のチェコにおけるプラハの春、一九八〇年のポーランドにおける連帯運動の歴史的意義に勝るとも劣らないように思われる。さらに歴史を遡れば、一八七一年のパリ・コミューンを思わせるような状況さえ一時は呈したのであった。また、わが国における六〇年安保と比較してみても、そこに多くの共通性があったことを、六〇年安保の運動者の一人でもあった私は痛感せざるをえないような広範な大衆運動であった。

しかしながら同時に、これらの運動は短期的にはすべて挫

「人民の波」の高揚と沈潜



国全土を震撼させた。今回の運動を何と呼ぶべきか、いまだに定かではないが、私はこれを「四・五月革命」と呼んでよいのではないかと思う。それは連日百万規模の学生および市民が天安門広場を埋めつくしたというその規模においてのみならず、その性格において画期的なものがあつたからである。

民主化を求める学生たちは、今日の中国の現状に悲壮なまでの絶望感を抱いており、中国共産党の一党独裁体制に対する根本的な不信と批判をその背景にしていたといわなければならない。しかも彼らは中国の政治が毛沢東時代と根本的に変わらない「人治」の政治である現状に対して、声高らかに「法治」を要求して立ち上がったのである。中国の学生、知

折したという歴史的共通性をも思い浮かべることができ、運動の当面の敗北にもかかわらず、こうした学生運動、市民革命がその後の歴史に大きな変革をもたらした点において、共通するものがある。今回の「四・五月革命」の意義はやがて中国の将来を大きく規定してゆくであろう。

よく知られているように、パリ・コミューンは一八七一年三月から五月まで約四十日間の短命なものであったが、下からの民衆革命として、そしてまた都市周辺の市民が首都を奪回したという事実によって、やがて第三共和制への道を切り開いていった。一九一九年の五・四運動も、北京のデモには学生約三千人が参加したという、当時としてはたいへんな規模であり、六月三日にいたるとストライキ闘争へと進展して全国に広がったものの、やがて当時の中央・地方軍閥による弾圧を受けたのである。プラハの春やポーランドの連帯運動も、この点では学生運動、市民運動、あるいは知識人を中心とする運動の挫折を体験したが、やがて今日にいたる東欧の社会主義に大きな変革をもたらしつつあることを忘れるわけにはいかない。

わが国の六〇年安保も運動としては敗北したのであるが、しかしながらそのことがもたらした意義は、単に運動を支えた側のみならず体制側にも多くの教訓を与え、日本のその後の市民社会的成熟と変化に大きな意味をもったことは否定し得ない。

もとより中国においても文化大革命、さらには毛沢東体制

末期の天安門事件がある。こうした中国における大衆動員の歴史は、さらに五〇年代の人民公社・大躍進運動にも遡ることができ、しかしながらこれらの運動は党中央の権力闘争と直接結びついた、もしくは上からの毛沢東カリスマ支配による大衆動員であり、大衆が盲目的にそれに熱狂した自己運動であつたし、天安門事件も、当時の四人組対鄧小平らの党内中枢における権力闘争との直接的な関わり合いが歴然としていたのである。

こうした運動に比べて、今回の事態は基本的に性格が異なっていた。もちろん以下に分析するように、当面の熾烈な党内闘争、権力闘争とこの学生運動との関連を無視することはできないが、学生たちは党内闘争にコミットするために学生デモに立ち上がったのではないことは明らかであり、中国当局が指摘しているように趙紫陽総書記と結んだ「ひと握りの破壊分子」がこの運動を煽動したものでは決してない。むしろそれらの党内闘争を乗り越えて大衆的規模における権力批判、共産党批判、さらには社会主義への根本的な挑戦をつきつけていたところに今回の「四・五月革命」の大きな特徴があり、画期的な歴史的意義があつたといわなければならない。だが同時に社会主義権力国家において、いわゆる体制内革命がいかに困難であるか、という冷徹な現実を教えた点では、ブラハの春やポーランドの連帯と共通するものがあつたといえよう。にもかかわらず、私は今回の事態を直視すればするほど、中国が絶望のどん底にあつて、その最底辺からよ

うやく立ち直ろうとしている内的な衝動をそこに見ることができるのである。

「四・五月革命」の性格と当局のジレンマ

今回の運動を見て画期的なことは、学生たちが「人治よりも法治を」というスローガンを掲げたことであるが、ゴルバチョフ訪中によるまさに世紀のサミットとしての中ソ首脳会談が行われている舞台でこうした運動が高揚したという、きわめて衝動的なドラマ性がそこに加味されていたことはいうまでもない。五月十六日は中ソ首脳会談にとって重要な一日であり、午前十時から予想を上回る二時間半にわたる鄧小平・ゴルバチョフ会談、午後二時からの政府レベルの李鵬・ゴルバチョフ会談、夕方からの党レベルにおける趙紫陽・ゴルバチョフ会談が相次いで行われた。中ソ首脳会談の冒頭、鄧小平・党中央軍事委主席は一連の中ソ和解へのメッセージを明らかにし、ゴルバチョフ書記長がそれに応えてきたことを明らかにした。この場において党と党との関係を含む中ソ関係の歴史的な正常化が宣言されたが、その場面を見ているかぎり、世界のスター・ゴルバチョフ書記長も鄧小平の前では「老師の前の学生」の観を呈しており、過去三十年間にわたって中ソ論争から中ソ対立へ、そして中ソ和解へと動いてきた現代史の重要な一章の当事者である鄧小平の存在の大きさを浮き彫りにさせたのであつた。

しかし、外部世界から見るとそれほど大きな存在であつた鄧小平に対し、中国の学生や市民はその労をねぎらい、鄧小平の功績をたたえるのは正反対に、「お前は何者なのだ」と真正面から異議を申し立てたのである。現行の憲法や党規約に照らせば鄧小平は国家主席(元首)でも、國務院総理(首相)でもなければ、中国共産党を代表する総書記つまり書記長でもないのであつて、その鄧小平がこの期におよんですべてを牛耳ったことに對する不信と疑念が、ベレストロイカの旗手として歓迎されたゴルバチョフ書記長との会談によつていきおい増幅されたことはいふまでもない。

冒頭に引いた中国共産党規約が明白に規定しているように、「いかなる個人も組織の上に君臨できない」ことを前提にして採択された一九八二年の新しい党規約、まさに「鄧小平党規約」が存在しているにもかかわらず、中ソ首脳会談に映しだされた鄧小平の姿は、その後の強硬措置へと精力的に動いた彼自身の役割を含めて、まさに超法規的な存在なのである。

その日の夕刻、ゴルバチョフと会談した趙紫陽の姿がテレビの画面で放映されたが、そこには重大ななぞが秘められていた。私はたまたま衛星放送を解説して臨場感あふれるその場面を目撃したとき、一瞬ギクリとしたのだが、趙紫陽総書記は次のようなことを語つたのである。すなわち一九八七年秋の中国共産党十三期中全会において、鄧小平は政治の第一線を引退したけれども、中国においてはすべての重要事

項の決定は鄧小平にゆだねられている、という告白である。この言葉を語つたときの趙紫陽は、テレビのカメラに顔を向けるのでもなく、面をあげてゴルバチョフ書記長をみつめるのでもなく、伏目がちにこの重要事項をもらしていたことが印象的だつた。すでにこの時点で党内で孤立していた趙紫陽は、自分の窮状をテレビの画面を通じて天安門広場の学生や大衆に訴え、ゴルバチョフに告白し、さらに全世界に伝えようとしたメッセージであつたのである。そしてまた、党規約上は党の最高指導者である趙紫陽総書記であつても、すべてを鄧小平に牛耳られてしまったと身動きできない今日の権力中枢の窮状を訴えたものであつたといわなければならない。この発言は実は中国共産党における秘密決議事項であつたのである。すでに報じられているところによると、右の事実が党の最高機密をもらしたという趙紫陽総書記の重大な罪状の一つに数えられている。

その翌日、ゴルバチョフ書記長が北京を離れた夜、趙紫陽総書記はハンガー・ストライキ中の学生たちと対面するため天安門広場に出かけていったが、彼が一瞬感涙にむせぶ面が印象的であつた。一方、学生との対話に臨んだ李鵬首相は、四月二十六日の鄧小平の意向に基づく「人民日報」社説に「必ずや旗色鮮明にして動乱に反対せよ」の「動乱」規定によつて、強硬に学生を弾圧する方向で学生たちと訣別し、翌五月二十日午前十時を期して、建国以来最初の戒厳令が首都北京に発せられたのである。

しかも戒厳令布告に際しての李鵬首相の演説には、重大な過誤があった。それは「私が政府と党を代表して戒厳令を布告する」というステートメントであるが、趙紫陽は党の総書記であるので、当然、党中央委員会を開いて趙紫陽解任を決めないかぎり、伝えられるところの政治局拡大会議方式では趙紫陽解任の法的根拠はまったくないのである。

つまり民主化を求める学生や市民、大衆のデモの高揚の眼前において、鄧小平・李鵬体制の中国当局は、今日の中国共産党規約に保証されている党内民主主義の基本原則をそのものごとく重大な事柄に関してまたもや踏みについたといわなければならぬ。このことはやがて中国共産党の将来、および中華人民共和国の将来に大きな代価としてはね返ってくるだろう。

ではそうした危険をおかして、なぜ戒厳令を急遽布告したのか。今回の一連の学生デモはその規模の大きさにもかかわらずきわめて整然としたものであり、ハンガー・ストライキを中心とする「平和的請願」を中心としていたのであって、首都を暴力的に破壊したものでなければ社会的混乱を惹起したものでなかったにもかかわらず、あえて戒厳令を強行したのは、次のような深刻な事態があったからだとは私は見てゐる。

すなわち、中ソ首脳会談が行われた北京の舞台は嚴重な警備態勢が敷かれていたのであり、その首都の治安は人民解放軍第三十八軍「万歳」部隊および北京衛戍区の治安部隊によ

って維持されていたのであるが、彼らはゴルバチョフ訪中の安全を期するために全力投球をしたものの、ゴルバチョフが北京を去ったその日から学生を鎮圧すべきという方向が打ち出されたことに大きな抵抗を示しはじめたのである。この緊急事態のなかで三十八軍副軍長の自殺という情報を私は入手していたが、さらに三十八軍の軍長は辭表を提出するという事態にもなった。つまり首都の治安を維持すべき「近衛部隊」そのものが動かなくなったという深刻な事態が起きていたのである。

そうした亀裂は単に人民解放軍首都警備部隊のみならず、おひざ元の北京軍区、さらには瀋陽軍区、蘭州軍区などの人民解放軍の主力軍区にまで広がり、鄧小平主席自身が統括する党中央軍事委員会にも民主化運動に呼応する動きが出てきたという事態があった。そして李鵬首相の指導下にある國務院の各部(省)および國務院の関連諸機関、とくに経済の開放と改革をになう経済関係の諸機関をふくめ、次々と民主化への呼応の動きがなだれ現象を起こしていたのであった。

つまり権力中枢において、ゴルバチョフが北京を去ったその日から状況は鄧小平・李鵬の側に不利に動きつつあり、彼ら自身が窮地に追い詰められていたことが、あのような戒厳令を強行させた決定的な理由であったとは私は見ている。にもかかわらず、戒厳令発令後にも人民解放軍は動こうとしなかった。二十一日に発せられた人民解放軍の声明「市民に告ぐの書」は、そのような軍内部の動揺を示していたが、さら

の様相をもつと見なしたゆえんである。

権力構造の亀裂と中国の命運

こうしたなかで学生たちは、中国の歴史において初めて、憲法擁護つまり「護憲」を強く叫びはじめた。学生たちは「護憲社会連席会議」の結成を訴えていたが、わが国ではしばしば手垢にまみれている「護憲」という言葉も、中国の歴史にとっては画期的なことなのである。それほどまでにこれまでの中国は、まさに人治の政治体制であり、毛沢東個人独裁体制の犠牲者であった鄧小平も、こうした中国的伝統からは結局逃れることができないのが今日の現実だといえよう。

つまり、中国は歴史的にも儒教的權威主義体制、家父長体制を伝統としてきているのであり、そこに中国の政治文化が存在するのだが、そうした前近代的な統治のシステムに対して、学生や知識人は「護憲」という近代的な政治用語で初めて対峙したのである。私が「知識革命」あるいは「市民革命」

しかしながら五月二十四日あたりから、再び状況が逆転しはじめた。カナダ・アメリカを訪問していた万里全人代常務委員長は学生運動への共感を示し、急遽帰国して全人代常務委員会を開催する旨を一時は語っていたものの、彼は上海に足止めされ、江沢民上海市委書記また一説には鄧小平じきじきの説得に屈伏してしまつた。かなり強硬な軍事的・政治的な圧力があつたと見なければならぬ。もともと万里は趙紫陽とともに鄧小平氏の信頼厚い部下であり、したたかな政治家でもないのに、彼にそれほど大きな期待はできなかったのだが、もしも万里が北京に直接到着していれば、北京の運動は再び高揚したかもしれない。

しかしながらこの頃になると鄧小平の強硬な意志が働き、

大修館書店

大漢和辞典

全13巻
別巻
語彙索引

東洋学術研究所編
語彙索引
新たに一冊「大漢和辞典」が
一層引きやすくなります。
定価12,360円(税込)
(90年5月発売)

図説
漢字の歴史
阿辻哲次 著
悠久の漢字の歩
みをたどる日本
で初めての通史、
定価14,420円(税込)

新装
普及版

ただい
第2回
配本中!!

▼熟語が五十音順で検索できる画期的な「語彙索引」付
B5判上製・函入
総計16,500頁

■定価各巻12,360円(税込)
■全巻セット定価173,040円(税込)

大きな文字で読みやすい
豪華大型版
修訂版(全13巻)
現定価227,630円(税込)

101東京・神田錦町3-24●内容見本屋

彼はこの間、学生鎮圧に消極的であった北京の軍隊を入れ換えるために武漢におもむき、自己の影響下にあるかつての第二野戦軍系統の軍隊を湖北省からも動員しようとしていたが配が濃厚である。鄧小平にとっては李鵬体制の崩壊はまさに彼自身の凋落であり、マルコス退場に見られたフィリピン型市民革命によって退陣することにもなりかねないだけに、絶対にそれを避けたいという強い意志が働いていたことはいくまでもない。

そもそも鄧小平が今回の事態を「動乱」と規定した背景には、彼自身の恐怖があったといえよう。つまりかつての天安門事件では四人組対鄧小平という権力構造の図式のなかで、「走資派」・鄧小平は「反革命分子」としてあらゆる職権を剝奪され、失墜していったという体験がある。彼は「李鵬打倒、鄧小平さがれ」という大衆のシュプレヒコールの前で、自らの運命への恐怖をバネに、徹底的な工作を行ったようである。

このあたりから運動は李鵬・鄧小平体制に有利なかたちで逆転していったが、ここにはもう一つ、大衆運動の側にも致命的な弱点があったといわなければならないだろう。まさに今回の大衆運動は「ひと握りの破壊分子」が画策したものではなく、きわめて広範な自発性を背景にしていただけに、そうした運動の常として強力なリーダーを欠いていたことである。

第二に、学生たちは中央党学校や國務院の各部門および関連研究所の革命派知識人・方勵之、厳家其、鮑彤らの急進派知識人の支持をバックにしていたが、その力は限られていたか、この重要な時期に朝鮮民主主義人民共和国を訪問して北京を留守にしていたことにも示されよう。

そして決定的なことは、趙紫陽自身、胡耀邦失墜事件に際しては鄧小平とともに胡耀邦追ひ落としに加担し、自らその後継者となった人物であり、さらに一連の経済改革・経済開放政策において今日の中国を救いようのない混乱に陥れた張本人であることである。したがって趙紫陽の指導力はきわめて限定されたものであったといわなければならない。彼自身は党内での孤立化を脱するために学生運動を利用したとさえいわれてもやむを得ないだろう。北京の学生たちは、趙紫陽を救済するために立ち上がったのでもないし、彼が決して学生や民主化運動にとつての「救いの星」ではなかったところに、今日の事態の重さがあるといえよう。

こうして北京を震撼させ、世界の目を釘付けにした「四・五月革命」はいまや急速に収束しつつあるように思われる。もちろん学生や民衆、知識人たちはこの運動をさらに全国に広げ、各地・各機関で教訓を掘り下げると誓いあっているが、このような大衆運動の常として彼らに疲労感も蓄積しており、運動方針をめぐる内部的な対立も徐々に芽生えつつあるだけに、当面は運動の後退を余儀なくされるものと思われる。

ある北京の知識人は、この間、私に通じた電話でひと言、「負けました」と印象的に語った。しかしながら長期的に見ればこの運動のもたらした意義は画期的なものであり、ましてや鄧小平はいよいよ中国の広範な大衆を敵として自分の余生——時間との闘いをせまられている現状にある。加えて事

といわざるをえない。そうしたなかで李鵬首相は、きわめて強硬な党官僚としての面目を遺憾なく発揮したといっているのではないかと思う。

第三の問題は、今日の中国権力中枢においては、陳雲党中央顧問委员会主任につらなる李鵬、姚依林らの原則派の指導者とともに、国家主席の楊尚昆あるいは王震、薄一波ら保守派の勢力が依然として隠然たる根をもっていることである。こうした保守派と原則派の政治的連合の前に、改革派の立場は党中央においてはきわめて薄弱なものであったといわなければならない。趙紫陽が政治局常務委員会では四対一で孤立し、拡大政治局会議では従来急進改革派と目されていた胡啓立政治局常務委員が趙紫陽支持に回ったとも伝えられているが、そもそも本来ならば北京大学出身でかつて六〇年安保の時代の中華全国学生連合主席であり、共産主義青年団のリーダーでもあった胡啓立は中国における民主化の旗手になるべき存在であったにもかかわらず、一九八七年一月の胡耀邦失墜に関しては態度を急変するなどして、党中央でもその信頼が薄かったのみならず、学生や知識人からもまったく人気がない存在になっていた。

しかも趙紫陽その人も、今回の事態を見ると、彼自身が党中央で追い詰められたがゆえに学生たちに呼応したのであって、初めから確固たる意志で現状を打開するだけの指導力に欠けていたといわなければならない。彼自身がいかに状況認識が甘かったかは、胡耀邦の死を追悼する四月二十二日の告別式において胡耀邦評価をなんらなし得なかったばかり

熊の拾収をめぐっては、鄧小平・李鵬体制を中心とする党中枢や長老たちのあいだの新しい亀裂も生じつつあるようだ。

彭真・前全人代常務委員長長の鄧小平批判と思われる発言も注目し直しよう。いづれにせよ、中国共産党はとりかえしのつかない歴史的な誤りをおかしているだけに、その前途はあまりにも多難である。

しかも絶望的なことに、一連の経済改革・経済開放政策も今日の中国社会にきわめて大きな混乱と腐敗、とくに党幹部の特権化をもたらししており、多くの中国民衆は社会主義体制そのものにうんざりしているのが現状だと思われる。ベレストロイカを進めるゴルバチョフに鼓吹され、一方では台湾における民主化への政治発展にも刺激されているだけに、こうした外からのインパクトは今日の中国をさらに大きく動かし、ゆくことになるであろう。

今日の中国にはいたるところに不満や苛立ちが鬱積していて、どこに火をつけても燃え上がるような状況にある。もしも今後の事態の進展いかんによって、かりに流血の事態がもたらされでもしたら、建国四十周年にして初めて起こったほんものの権力批判、ほんものの大衆運動の広がりを前に、やがては中華人民共和国解体の危機につながってゆくかもしれない。

権力闘争や路線闘争に飽き飽きしている中国民衆は、やがて自らの手で新しい歴史を切り開いていく、その第一歩が今回の「四・五月革命」によって深く刻印されたと見なければならぬと私は考えている。